



写真1 弥生時代前期の水田

JR玉手駅の北側で実施中の京奈和自動車道建設に伴う発掘調査では、これまでに弥生時代前・中・後期と長期にわたる水田遺構を検出しています。特に、弥生時代前期(約2500年前)の水田は、奈良県では最古級となる貴重な事例となります。

ふるさと御所 文化財探訪

※番外編※

京奈和自動車道
玉手地区の
発掘調査

弥生時代の小畦画水田を検出

生涯学習課 文化財係
☎内線696

弥生時代各時期の水田は、それぞれ洪水により運ばれてきた砂で覆われていました。そのため、当時のままの状況で検出でき、各時期に

おける水田の様相が明らかになりました。弥生時代の水田は、当初から水田と流路から構成されるなど、高い技術を伴っていたことが分かっています。しかし、一方で、弥生時代から古墳時代の水田は小畦画水田と呼ばれ、畦(畦畔)を地形に合わせて細かく区切ることにより、造成の労力を最小限とすることも特徴の一つです。

検出された弥生前期の水田(写真1)は、長辺約3.5～5.5m、短辺約1.5mの小さな長方形を呈しています。一方、弥生中期の水田(写真2)は1辺が約3～10mで、一枚一枚の大きさが形状が異なります。これは、以前の洪水によって地形の高低差が小さくなったため、畦を細かく作る必要がなかったためだと考えられます。ここでは、大きな畦(大畦畔)によって複数の水田がまとめられていることも分かりました。また、弥生後期の水田(写真3)は、1辺が約4～8mで、水路に沿って規則正しく作られています。水田のない場所は微高地となっており、畑となっていた可能性がります。これまで御所市内では、弥生時代の集落や墓は知られていましたが、生活の基盤となる生産遺跡としての水田が見つかったのは大きな成果です。

また、弥生前期の水田の下層では、縄文時代晩期末(約2800年前)の土器棺墓の存在も確認しています。これは凸帯文土器と総称される時期のもので、観音寺本馬遺跡で出土した縄文時代晩期末の篠原式(約3000年前)の土器棺墓よりも少し時代が下るものです。この凸帯文土器の時期の遺構が御所市内で見つかるのも初めてのことです。

★10月4日(日)に現地説明会を開催します

弥生時代前期の水田と縄文時代晩期の土器棺墓などを実際に見ていただけますので、ぜひお越しください。(27ページに案内記事を掲載しています)

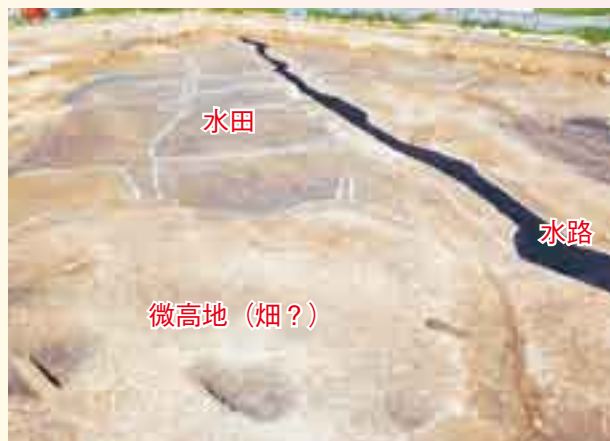


写真3 弥生時代後期の水田



写真2 弥生時代中期の水田

編集後記

犬の苦手な私にとって、「放し飼い」ほど恐ろしいものはない。人によく懐いていると言っても、それは飼い主側の視点であって、人によっては懐いてジャレる行動自体に恐怖を感じることもある。しかし、クマは犬の比ではない。数年前、北信州戸隠の山中を歩いていたとき、至近距離で親子のクマと鉢合わせになった。立ち上がった親クマと目が合い、一瞬間の中が真っ白になった。20分ほど長いにらみ合いが続く中、クマが目を逸らせた機会に私は少しづつ後ずさを繰り返して、30mほど離れてから一目散に駆け出した。野生の凄みを痛感する体験だった。(久)



2009.

10